
シンポジウム

論題：プラトニズムと中世哲学

司会 稲垣良典

中世哲学会第24回大会において行われた「プラトニズムと中世哲学」と題するシンポジウムの成果をめぐる評価は極端に分裂してはいないかと思う。消極的な評価としては、第一に、ひとつの討論としてのまとまりに欠けていた、という点が挙げられよう。すなわち、提題報告を行った4人のうち、松永、加藤の二氏はそれぞれプラトン自身の著作およびアウグスティヌスにおける「真理の探究」としての哲学の道にてらして、プラトンの哲学、およびプラトン自身とは何かという問いかけを深め、精確なものにしようと試みたのにたいして、大谷、清水の二氏はこれとは対照的に、12世紀および15世紀にラテン世界にもたらされたプラトンの著作がどのように理解され、受容されたかを歴史的につきとめようとした。これら二組の提題報告はまったく異質なものであり、掲げられた主題についてのまったく異った受けとり方を反映するものであって、このシンポジウムが同一主題の共同的探究としてのみりをあげることができなかったのは当然である。……

第二に、このシンポジウムにおいては「プラトニズムと中世哲学」という主題からふつうに期待される内容あるいは問題領域はほとんど触れられないままに終わった、との批判が当然出てくるであろう。たしかにアウグスティヌスを除外して中世哲学を語ることはできないし、12世紀が13世紀とは違った意味で、多様かつ豊かな知的活動の時代であったことは多くの研究によってあきらかにされたごとくである。しかし、中世哲学といえば第一に13、14世紀におけるいくつかの知的総合の試み、およびその批判的展開が思いうかべられるのであり、その意味でこのシンポジウムが13、14世紀に触れなかったのは重大な欠落として批判されても仕方がないと思われる。

他方、積極的評価として第一にあげなければならないのは、四つの提題報告がそれぞれきわめて充実した内容を持ち、しかも鋭い問題提起をふくむものであった点である。たとえばプラトンにおける哲学の意味をあらためて、根元的に問いなおそうとする松永氏の試みは、人間の存在への徹底的な立ち帰りにおいて存在そのものへの超越の道を探ろうとする同氏の一貫した思索のあり方を反映していて、哲学史的研究と哲学することとの見事な統一を示していたように思う。ソクラテスとプラトン哲学との関係をどう捉えるのか、またアイデアの「それ自体における存在」とは、善とか美は「……にとって」在るという限定から離れて、まさにそれ自体の存在を持たねばならぬことの表明であった、という解釈に関しては種々の問題や異論が予想されるし、そのいくつかは実際に討論のさいに提出された。しかし、松永氏の提題報告が、おそらくは参加者のだれもがそれぞれの仕方で抱いていた問題意識にひとつの明確な表現を与えたことはたしかであり、それはこのシムポジウムにおけるひとつの成果であった。

同じことが加藤、大谷、清水の三氏が行った報告についてもいえると思う。加藤氏はさきに『理想』誌（1975年11月、12月）において古代哲学における哲学の道—方法（「ホドスとメトドス」）について詳細に考察したさいに、アウグスティヌスにおける哲学の道についての論究がこれに続くべきこと、そこにおいてかれのいわゆる照明説をただしい光の下におくであろうことを約束したが、今回の報告はその約束の成就であった。アウグスティヌスがどのようにして乏しい、そして間接的なプラトンに関する知識からして、あのように深く、感動的なプラトン理解に到達したのか、不思議という他ないが、加藤氏はそれを可能にしたのはアウグスティヌス自身の哲学の道としての、真理の問題への根源的な関わりであると見て、そこにアウグスティヌスのプラトニズムを理解するための手掛りを求めた。

大谷氏は12世紀のシャルトル学派の自然研究にたいして『ティマイオス』が与えた影響を中心に、中世哲学の開花期におけるプラトニズムの様相を手堅く分析した。大谷氏が指摘するシャルトル・プラトニズムのもっとも大きな特徴の一つとしての「自然主義」もしくは「自然学的プラトニズム」は、加藤氏が論じたアウグスティヌスのプラトニズムとはかなり対照的であり、プラトニズムとは何かという問いをあらためて鋭く意識させるものであった。

清水氏はプラトンの全作品をラテン訳し、いわゆるフィレンツェのプラトン・アカデミアの中心人物となったフィチーノを中心に、15世紀におけるプラトニズムの新しい展開を詳しく描き出した。それによって、中世哲学におけるプラトン理解・受容の特徴がうきばりにされ、プラトニズムおよびプラトンの本質に向けられた問いが、鋭さをましてあらたに迫ってくるはずであったが、さきにふれたように、13、14世紀におけるプラトニズムの考察が欠落していたため、清水氏の報告の意義が十分に展開されないままに終わったのは残念というほかない。しかし、その報告がそれ自体としてきわめて内容の豊かなものであったことは疑いをいれない。

第二に、これはシムポジウムの成果として積極的に評価すべきものではないかもしれないが、提題報告がプラトン、プラトン哲学の本質へ向けられた哲学的な問いと、或る時期におけるプラトンの著作の理解・受容の型態に関する歴史的研究とははっきりと分れていたことは、このシムポジウムの主題にふくまれている問題性をはっきりさせるのに役立った、とはいえるであろう。じっさい、後者の研究にたいして十分な考慮をはらうのでなければ前者の問いはひとりよがりにもろくおそれがあり、また前者の問いを意識することなしには、後者の研究は最終的な意味を失うのであって、これら二つの接近方法は互いに切り離してしまうことの不可能なものだからである。このことを4人の提題者が意識していたことは、それぞれの報告およびそれに続く討論においてあきらかに示されていたが、これら二つの接近方法が互いに噛み合うような仕方でも討論を展開させることができなかつたのは、司会者として残念でもあり、またその責めを逃れることはできないと思う。

「プラトニズムと中世哲学」という主題はとうてい1回の討論をもってしては、そこにふくまれている問題群の主要なものに触れることすら不可能なくらいほう大なものであり、今後何らかの形で討論を通じての共同的探究を継続してゆくべきであろう。そのさいの参考になることを願って2、3のことを記しておきたい。

プラトニズムと中世哲学との関わりを、創造の問題を中心に吟味することは、プラトン哲学の本質に関して、また中世哲学におけるその受容の特異性に関してあらたな洞察へと導くのではないかと思う。ここで創造の問題というのは『ティマイオス』において語られている「創造」に関するものではなく、プラトンの存在論と

キリスト教が教える「無からの創造」との関わりの問題である。もっと細かくいうと、トマスは創造の問題について考察するさいに、必ずといっていいくらい「存在」把握の歴史をふりかえり、そのなかにプラトンやアリストテレスの寄与を位置づけているが、その場合トマスが行った位置づけは正確なものであるか、という問題である。

つぎに、右の問題と関連して、プラトニズムと「キリスト教的哲学」との関係も、プラトニズムと中世哲学という主題の一つの側面、あるいはそれと部分的に重なるもう一つの大きな主題としてとりあげるに価いするのではないかと思う。プラトニズムが精神的実在についての明確な認識を示すものとして、また真理あるいは智慧の探求の徹底した在り方を代表するものとして、キリスト教信仰にとってもっとも親密な、受容に適した哲学と評価されたことは確かである。他方、プラトニズムは——これはむしろ新^{**}プラトニズムについてあてはまることかもしれないが——そのグノーシス的展開を通じて、キリスト教にたいする競争者あるいは敵対者となるような要素もふくんでいたように思われる。これらの点の考察はプラトニズムの本質を解明するのに有力なてがかりを与えてくれるのではなかろうか。

つぎに新^{**}プラトニズムと中世哲学、アリストテリズムと中世哲学などの主題は、それぞれぼう大なものであるが、そうした主題をめぐる考察はプラトニズムと中世哲学という主題にふくまれている問題をより明確にしてゆくのに役立つであろう。

さらに、プラトニズムと中世哲学という主題は、たとえば「トマスの総合」synthèse thomiste においてプラトニズムが果している役割の考察を通じて、集中的に探究される必要があると思う。トマス哲学におけるプラトニ的要素については、古くはトマスの「主知主義」——ratio と intellectus の区別——の核心をなすものとしてその重要性が指摘され、その後「分有」participatio の観念がトマスの形而上学において果した重要な役割の再発見を通じて、あらためて活発な論議を呼びおこしたことは周知の通りであるが、その後のトマス研究の進展にてらして再検討する必要があると思われる。

さいごに、プラトニズムと中世哲学という主題をめぐる探究は、中世哲学研究にとっての重要な課題であるのみでなく、プラトン哲学の研究にとっても不可欠ではなかろうか。エラスムスは「もしアリストテレスが（スコラ学者たちの手で）

キリストに結びつけられていなかったら、とくに消え去っていただろう」と語り、ピコ・デラ・ミランドーラも「トマスがいなかったらアリストテレスは啞のままだったろう」と話したと伝えられるが、同じことがプラトンとアウグスティヌスについて言えるかどうかは知らない。しかし中世哲学なくしては、総じてこんにちの哲学が成立しえなかったことはたしかであってみれば、プラトンの「哲学」に迫ろうとする者がアウグスティヌスや中世哲学を無視することは、おそらく許されないであろう。

提題

プラトンの *philosophia*

松 永 雄 二

φιλοσοφία というのは、異様な言葉である。一般に、知とは、つねに「……についての知」という仕方であらわれ、そこにさまざまな *ἐπιστήμαι* (scientiae) が成立するものとみなされる。しかし、プラトンにおいてこの語は、そしてその動詞形 *φιλοσοφείν* というのは、そのような仕方での対象領域を明示されないままに、たとえば「知を愛し求めながら生きねばならない」*φιλοσοφούντά με δεῖν ζῆν* (『弁明』28E) とか、また、「知を求めることは、死を練習することである」…… (sc. *φυγή*) *ὁρθῶς φιλοσοφούσα καὶ τῷ ὄντι τεθνάναι μελετῶσα ῥαδίως* (『パイドン』67D, 80E) という風に、端的に語られているのである。ではそのような *φιλοσοφία* とは、いったい何であるのか。われわれは即座にそれを、何かわれわれの学的探究の総体をなし、特にその原理的な事柄にかかわる知的な営みであるとか、あるいはまた何か特別の存在(永遠不変の存在)にかかわる知であるとか、さらにはまた単純に、何かわれわれがよく生きる (*εὖ ζῆν*) ためになくしてはならない知であるという仕方、定式化してはならない。なぜなら、差当っていえば、「知を愛し求める者」というのは、とりもなおさずその *φιλοσοφία* という謎——それはまったく異様なものでありながら、しかもわれわれ人間にとってつねに必然的であるような謎——に耐え、それをみずからの思索の途において方法化しえたひとに他ならないか